

## 小麦の追肥は1回、 国産石灰窒素1,400袋施用で 収量・品質アップ

長野県安曇野市堀金青柳正幸さん



長野県安曇野市は、常念岳はじめ北アルプス連峰を背景にした美しい田園が広がる農村地帯である。同地は松本市の中心街から北西約15km、車で約30分の位置にある。

2月はじめの頃、青柳さんから「小麦とそばの二毛作で石灰窒素を年間1,400袋(28t)使用している」という手紙をいただいた。正直、最初は半信半疑で、今まで年間1,000袋以上も使用している農家に出会ったことがなかった。

そこで、どのような農業を営んでいるかを教えていただきたく「ぜひお会いしたい」との申し入れをしたところ、快く受けていただいたので、4月中旬、桜が満開の安曇野市堀金の自宅をお訪ねした。

### 小麦とそばの二毛作、水稻を経営

青柳さんは、もともと養豚・肉牛経営を行っていたが、7年前から土地利用型農業に本格的に取り組んでいる。現在の経営面積は、小麦とそばの二毛作で45ha、水稻が10haの計55haで、そのうち自作地は約5haである。

経営の特長としては、播種や収穫時には農業機械のオペレーターとして近隣の農家2～3名にお願いし、それ以外は青柳さんだけで作業している。主要な農機具類はトラクター20台、コンバイン11台、その他農機具を導入して高度に機械化された農業を実践している。また、スガノ社製リパーシブルプラウ機2機を青柳さん用に特別仕様にするなど、「土づくり」へのこだわりがうかがい知れる。

### 小麦の追肥に国産石灰窒素を施用

国産石灰窒素は「小麦の追肥」として6年前から使い始めたという。品種は「しらね小麦」(麺用)で、播種は11月20日から11月下旬、そば栽培の兼ね合いで遅播きになる。基肥はBB372を80kg/10a施用している。

当初、追肥には2月下旬～3月上旬に硫安を施用していたが、1回追肥では収量が低く、またタンパク含量も低く規格外となるため、4月下旬から5月上旬に2回目の追肥を実施していた。しかし、これらの作業をする時間的な余裕がないうえに、労務コストもかかってしまうという問題があった。

そこで、国産石灰窒素を使い、1回追肥の試験を行った。当初は30kg/10aで追肥したが、やや物足りなさを感じ60kg/10aに増やしたところ、タンパク含量は10～12%と規格値の上限を確保でき(硫安1回追肥では7～8%)、収量も20%増え、さらには雑草を完璧に近く抑えることができた。また、後作のそば栽培で、肥料を改めて施用しなくても増収するとともに、子実が充実して品質が向上し、すぐれたそばが生産できることが確認できた。肥料代は硫安に比べ割高になるが、それ以上に収量・品質の面でプラスの効果があるという。

### 「農業は楽しくてしょうがない」

そばの脱穀、乾燥は自前の設備を使い、8区分に選別するなど、厳重な品質管理をしており、安曇野産そばのブランドを確立した。県内の開田高原にある会員制そばメーカーへ独自の販売ルートを持っており、すでに農業の6次化を実践している。青柳さんは、栽培技術をはじめあらゆる面で「チャレンジ精神」を発揮して、ご自身の農業を進化させている。

また、国産石灰窒素の3機能「肥効の遅効性」「土づくり効果」「雑草抑制の農薬効果」を自分の農業にフル活用する

とともに、国産石灰窒素の特性を十分理解し気候の変化などにも対応している。  
青柳さんの農業観を尋ねたところ「農業は楽しくてしょうがない」との言葉が印象的であった。



青柳さん特別仕様の  
リバーシブルプラウ機